

占領政策の推移

◎1945(昭和20)10月2日

連合軍最高司令官最高司令部 GHQ/SCAP

東京に設置 第一生命ビル



1)はじめに ※占領前期(民主化政策が主体)1945(昭和20)年～47(昭和22)年頃。

敗戦で焦土と化した国土、国民の生活も惨憺たる状況でした。加えて、日本の歴史ではじめて外国の軍隊の占領に直面し、物資的にも精神的にも荒廃と混乱が生まれました。1945年8月末からの連合軍の進駐は、アメリカ主体とした占領軍でした。この評価を巡り、問答無用の権力で無理を押し付けたとする意見、これが憲法改正の根拠となっています。また、占領軍を解放軍と見るのはアメリカ帝国主義美化であり、占領軍の施策をすべて否定する意見もありました。こうした意見は、事実から見て正しいとは言えません。占領軍の施策にも「治安維持法の撤廃」「農地改革」「新憲法」など多くの民主的施策がありました。戦後、日本に進駐した連合軍は、「ポツダム宣言」の実行を使命とするものでしたが、アメリカを主体とする占領軍だったため、アメリカの単独占領下におかれるという一面も持っていました。もちろんアメリカ軍といえども、連合軍としての日本進駐であり、第二次世界大戦の性格(反ファシズム連合と日独伊侵略ブロックの戦争)も反映してポツダム宣言や極東委員会の対日基本政策と、対日理事会の一定の拘束を受けざるを得ませんでした。アメリカは戦後初期には、かつての敵対者だった日本軍国主義弱体化の政策をとりました。そのために一定の民主化が実行されました。この複雑な動きを事実に基づいて検証することは、戦後の出発の原点として欠かせないことです。また GHQ やその一部局である CIE・民間情報教育局が行ったとされる日本人洗脳工作もその一つと言えます。(※参考文献:いまなお蔓延はびこる WGIP の嘘、日本人を狂わせた洗脳工作・関野通夫(せきのみちお)著・自由社ブックレット刊。)戦後50年を過ぎると当時を知る人々も少なくなってきました。そこから、自分の主張に都合の良いように事実を捻じ曲げる意見がたくさん横行しはじめてきました。文章では事実を捻じ曲げた主張も出来ませんが、映像ではそのような捻じ曲げはできません。例えば、憲法施行1周年の映像は当時の芦田総理が祝辞を述べ、天皇が万歳を三唱。憲法施行5周年では、当時の吉田総理が祝辞を述べ、天皇・皇后が万歳三唱し、集まった群衆の喜びにあふれた姿も映しています。今になって、この事実を否定することは出来ません。また、国民生活を映した映像でも、耐乏生活を強いられた国民がヤミ物資の横行の不満が高まっている中での、ヤミ取り締めりを映した映像、国民の健康が破壊され、結核が広がっているため、厚生省が主催した公衆衛生啓発の列車展示に皇后・秩父宮ご夫婦・片山首相が出席した映像なども興味深いものです。この占領期間の約120時間に及ぶ「ノーカット」の16・35mm映画の記録は未来永劫、事実を持って当時の息吹を語る貴重な資料となることでしょう。

文章では史実を捻じ曲げることは容易に主張できるが、特に連続した映像では、否定することは不可能である。

2)民主化から抑圧へ ※占領後期(政策の変化・反共政策が主体)1948(昭和23)年～1952(昭和27)年。

アメリカ占領軍政策の変化これまで述べたような民主化政策も数年で逆の抑圧的政策へと、アメリカ占領軍の政策は変化しました。民主的変革を目指す日本国民の運動が占領軍の政策と対立する時は、占領軍の暴力と強制で抑圧されました。中国革命の前進、日本民主的運動の高揚のなかで、1948年2月、アメリカ国務省のジョージ・F・ケナンは、「占領政策の民主的措置が共産主義者を利する。」と述べ、1948年5月の公職追放緩和や戦争犯罪者裁判を早く結審するよう勧告しました。これを受けて、東宝争議の弾圧(1948年8月19日)、翌1949年5月30日には、東京都公安条例反対デモで、警察隊の弾圧で東交労働者橋本金二氏が虐殺され、次いで日鋼広島的首切り反対闘争を警官が制圧するなど民主化圧殺が続きました。1952年の皇居前広場のメーデー・デモ隊を数千人の武装警官隊が襲撃(メーデー事件)、1950年6月25日に勃発した朝鮮戦争をめぐる国内外の動きへと映像記録は変化していきます。この前後にも砂川事件など米国を取り巻く多くの事件が起きています。「大きく変わった政策変更、1950(昭和25)8月10日、自衛隊の前身、武装組織「警察予備隊」が設置されました。」、国内外のいろいろな出来事は、多くの事を教えています。映像コンテンツ編集の分類テーマ①～⑩に沿って調べると、アメリカの戦後改革・政策の矛盾、それに伴う「間接統治」による占領下の不思議な出来事など占領支配下教育の多くが学べます。令和3年(2021)5月 エムティ出版編集部